

# 日本で初の現代カナダ絵画展

## 東京、札幌、大分で二十五人、作品八十九点を紹介

現代カナダを代表する画家たちの作品が、日本では初めて紹介されることになった。「二十世紀カナダ絵画展——大自然の律動」と題するこの展示会は、日加文化協定に基づき、カナダ国立美術館が準備し、朝日新聞社、東京国立近代美術館、文化庁、北海道立近代美術館、大分県立芸術会館、カナダ外務省などの後援・協力によって行うもので、七月から十一月にかけて東京、札幌、大分の各地で順次開催される。これを機会に、同展示会と先に開かれた「十人のカナダ版画展」の出品作を何点かカラーで紹介するとともに、現代カナダにおける絵画と版画の歴史や動向をお伝えしよう。

「二十世紀カナダ絵画展」の話が持ち上ったのは、日本の美術関係者たちがカナダを訪れた一九七七年。

最終的な展示品の選択は一九八〇年十一月に日本の美術館関係者と協議の上決定された。その規模は時代的には一九〇〇年以降現在までをふくみ、二十五人の作家による作品八十九点が展示される。そのなかにはカナダ美術の歴史をかざる大

家たち、トム・トムソン、エミリー・カー、L・L・フィッツジェラルド、アレックス・コルヴェイユ、ジャック・ブッシュ、ギド・モリナーリなどが紹介されている。展示品の約半数は国立美術館所蔵の名品であり、これに各地の公共機関のコレクションからも作品が加えられている。

一九〇〇年以降今日までというのがこの美術展のカバーする時代範囲であるが、そこにはカナダ美術の最初の国民流派の形成期がふくまれる。ジェームズ・モリス（一八六五—一九二四）、エミリー・カー（一八七二—一九四五）といった画家をはじめとして、この美術展の歴史部門ではやがて「グループ・オブ・セブン」、オートマティスト、「ペインターズ・イレブン」などのグループの形成につながっていきざまさまざまな地方の画家たちの活躍を追う。

カナダにおける最初の意識的な「現代美術」——ただ単に時代に遅れまいとして——の発生は一九〇七年のカナダ美術クラブの結成に加わった作家たちの作品に見られる。彼らの多くは

海外に活躍の場を求めたが、カナダ国内で制作していた時からすでに情感による効果に力を入れる傾向が強く、従ってその作品は当時の世界の美術界の主流であった印象派の画風に近似している。数年

後、J・E・H・マクドナルド（一八七三—一九三二）、ローレン・ハリス（一八八五—一九七〇）などの若手のグループが濃厚な風土感覚をもった作品に取り組みはじめた。後に「グループ・オブ・セブン」になる中核が第一次大戦前のこの時期に形成されたのである。

二〇年代半ばになると、このグループは北部原野のスケッチ小品によって知られるようになり、彼

らの描く風景画はカナダの多くの画家たちに強い影響をあたえるようになった。一九三〇年代には、「グループ・オブ・セ



ウィリアム・ロナルド「川」(1956年作)